コロナと「五輪構文」

田中　史郎

ネットでは「五輪構文」なるものが流布している。新型コロナ感染が拡大傾向にあり、深刻な事態になることが明らかであるにもかかわらず、政権はオリンピックを強行した。予測通り、事態は最悪になっていった。そして、オリンピックが終わると、今度は「帰省」を控えるように恫喝ともとれる発言が続いた。

オリンピックの開催強行に関して、菅総理は実に訳の分からないことを言い続けてきたが、それを捩（もじ）った表現が「五輪構文」だ。総理発言の「オリンッピック」を「帰省」に替えたものである。前総理の文言を捩ったものもあるが、詠み人知らずの全 17 作品全てを列挙しておこう。

①「中止の考えはない。強い警戒感を持って帰省に臨む」、②「バブル方式で帰省する。感染拡大の恐れはないと認識している」、③「帰省を中止することは一番簡単なこと、楽なことだ。帰省に挑戦するのが国民の役割だ」、④「安心安全な帰省に向けて全力で取り組む」、⑤「コロナに打ち勝った証として帰省する」、⑥「（帰省は）今更やめられないという結論になった」、⑦「『帰省するな』ではなく、『どうやったら帰省できるか』を皆さんで考えて、どうにかできるようにしてほしいと思います」、⑧「もしこの状況で帰省がなくなってしまったら、大げさに言ったら死ぬかもしれない。それくらい喪失感が大きい。それだけ命かけて帰省する為に僕だけじゃなく帰省を目指す国民はやってきている」、⑨「家族に感動を与えたい。帰省はコロナ禍収束の希望の光」、⑩「我々は帰省の力を信じて今までやってきた。別の地平から見てきた言葉をそのまま言ってもなかなか通じづらいのではないか」、⑪「（帰省中止要請は）自主的な研究の成果の発表ということだと思う。そういう形で受け止めさせていただく」、⑫「言葉が過ぎる。帰省中止を決める立場にない」、⑬「帰省が感染拡大につながったエビデンスはない。中止の選択肢はない」、⑭「（帰省について）政府は反発するだろうが、時間が経てば忘れるだろう」、⑮「帰省することで、緊急事態宣言下でも帰省できるということを世界に示したい」、⑯「帰省について限定的、統一的な定義は困難」、⑰「実家を訪問するという認識。帰省するという認識ではない」。

全 17 作品、いずれも天晴（あっぱ）れなパロディだ。これをみると、総理の言葉が如何に無内容かが改めて浮き彫りになる。

このところの政権支持率は、ほとんどの世論調査で 3 割を下回っている。総理以下、一刻も早く辞めていただきたい。もはや感染拡大は、パロディで済まない事態に達しつつある。コロナは「忖度」してくれない。

（『センダードつうしん』第 4 号、2021 年 9 月）